

「人間は樹木のごとく……」(II)

——樹木と二人の旅人——

佐佐木茂美*

ヨーロッパ中世にとっての東方世界の歴史および地理の貴重な資料——と言うよりも虚実ない交ぜの記述、マルコ・ポーロの余りにも著明な『東方見聞録』¹⁾はオリジナルはすでに消失している。しかしそれに非常に近いパリ国立図書館所蔵の最古の写本(B. N. f. fr. 1116)(14世紀初頭)²⁾を——イタリア語のアクセントの強いフランス語——マルコ自身が仏王フィリップ4世の兄弟によりヴェネツィアに遣わされていたチボー・ド・シュポワ(Thibaut de Chepoy)に1307年8月謹呈する³⁾。かれは帰国後そのヴァージョンのイタリア訛りを修正、フランス王宮廷の趣向を考慮し、改変させる(省略部分もある)。この14世紀の真正のフランス語による改定版⁴⁾がコピーを重ねる。

序論は「人間の様々な人種と世界の様々な地方の多様性」(*deverses jenerasions des homes et les deversités des deverses regions dou monde*)⁵⁾を、アルメニア、ペルシャ、タタール、インド、等の「最も大いなる驚異のすべてと大いなる多様性」(*toutes les grandismes mervoilles et les grant diversités*)⁶⁾を「マルク・ポル氏が」(*messires Marc Pol*)語るとし、序論末尾は「かれが見、かれが聞いたすべて大いなる驚異を書き取らさないのは、」これは残念なこと、——とマルコが考えたことになっている——⁷⁾、と結んで、アルメニアの項目に入る。書き取りをしたのはアースー王伝説関係の主題を手掛けたリュスティアン・ド・ピーズ(*Rusta Pise*)⁸⁾と両写本ともに読まれる。

『世界の叙述』、『驚異の書』と写本間の異動する書名は邦訳書名『東方見聞録』には読み込めぬ「叙述」と「驚異」⁹⁾の間を右往左往する意識の移りが注目される。さらに「多様性の叙述」(*Devisement des Diversités*)とプロローグが続く部分は名付けられている¹⁰⁾。「差異」、「多様性」の強調とそれが旅行者の眼に「驚異」、「驚嘆」¹¹⁾を惹き起こすことが巻頭から予告されている。

著者の商人出身からただちに理解されるよう、シルク・ロードを行き交う商人の「道案内」というきわめて現実的目的が、——「大航海時代」にあってなおコロンブス¹²⁾にとってもこの機能を果たしたことは知られている——初期ラテン語訳¹³⁾がとくに明らかにするよう東洋宣教の資料としても転用された。

旅は「多様性」という拡散方向で可能を志向し¹⁴⁾、「驚異」の名のもとに柔軟な許容を追い求める。

I. フビライの植林と造園

『見聞録』は3年半の旅路の末に1274年夏マルコとその父および伯父を迎え入れた第5代フビライ・ハーン（世祖）（1260-1294）を余すところなく称え¹⁵⁾、その人柄、その宮殿、その日常、その母后や后、複数の配偶者、近親者、狩猟、警備、軍隊等を記す。「この世のあらゆる皇帝、それがキリスト教徒であろうとイスラーム教徒であろうとすべての王に比しても、かかる偉大なフビライ・カーンの権勢には及ぶべくもない」¹⁶⁾、としてかれの宮殿を2箇所て詳述する。

a) まず上都の夏（6、7、8月）のフビライ自身の造営させた宮殿。大ハーンの宮廷およびその周辺を語るマルコの観察も「驚異」のもとに位置付けられている¹⁷⁾。

b) フビライには大都（北京）で冬期3ヶ月（12、1、2月）¹⁸⁾を過ごす習慣がある。1辺が8マイルの外壁と堀が取り囲み、その内側を走る（同心の方形）壁、その2重の壁の中央にハーンの宮殿が位置する。

宮殿以上にポーロの注意を牽いているのは庭園である。壁二重に取り囲まれ美しい牧場と「種々美しい果樹」¹⁹⁾がある。距離にして宮殿から一射程（archie）に築山（tertre）を造らせ1年を通じて常緑樹が緑の空間を提供している。それを確保するための所有者の執心が強調される。

「どこかに立派な樹木があると聞くと、（ハーンは）それがどこであろうとただちに人を遣り、取り寄せ、根ごと土を多量に付けたままかれの（樹を）象（olifans）に運ばせ築山に運び込ませる。」²⁰⁾

((...) là où soit *un biaux arbres*, et le seigneur le set ; si l'envoie querre *avec toutes les racines et avec toute la terre* qui li est entour ; et le fait porter et mettre ou sien mont. Et le portent ses *olifans*, et soit *l'arbre* tant grant comme il veut.)

樹木讃歌はハーンの権勢とあわせ、最高潮に達する。

maniere a les plus beaux arbres du monde

宮殿よりも庭園、庭園の中でも樹木が讃歌の対象となっている。樹木こそがハーンの権勢を表象し、その讃歌は最高に

「かくしてこの世のもっとも美しい樹木が（そこに）ある」

(Et en ceste maniere a *les plus beaux arbres du monde*)²¹⁾.

樹木の種は示されない。

ポーロが初めてヨーロッパ側の記述を残していることで特に注目されるのはモンゴルの元朝の統治者の奢侈と権勢を歌った部分——イランのイスラーム異端の首領、「山の老人」（Viel de Montaigne）が山中の谷に造らせた宮殿と庭園（ここでも前者は後者の一部として考えられている）である。おなじ樹木への趣向があり、樹木は「果樹」である。マンドヴィルも果樹と明記する²²⁾。

「かつて眼にしたこともなき、この世のあらゆる果実に満たされた最大の庭、もっとも美しい庭」

(le plus grant jardin et le plus beau qui oncques fust veuz, *plains de tous fruiz du monde*)²³⁾

ハーンにも、ヨーロッパにも知られないそこは「ぶどう酒、ミルク、蜂蜜、水」²⁴⁾が流れた「天国」(paradis)²⁵⁾として構想されている、と言う。「マホメットの言うようかれらの天国はぶどう酒、ミルク、蜂蜜、水の流れの多々設えられた麗しき庭」²⁶⁾。

ハーンのそれと異にしつつも、庭園の重視は変わらない。キリスト教同様に「天国」と「庭園」の同一視²⁷⁾がここにある。イスラームの庭園は飢えと渴きを知らぬ空間、樹木も飢えからの救いを保証する「果樹」²⁸⁾なのだ。

だがここにはハーンの庭園における決定的な樹木重視はない。また造園とくに植林に対する偏向はない、この点に本稿ではとくに注意したい。

ハーンの庭園に関する上記の具体的なディテール——当時最大の輸送力をもつ「象」による根付きのままの大木の搬入——は、観察者の感嘆の眼差しを容易に想像せしめる²⁹⁾。かかる動物を所有し、動員させる、これは富力と権勢と「愉楽」の極み³⁰⁾と西方からの旅行者の眼に映じたに相違いない。「象四頭」(quatre olifans)³¹⁾の上に輿を置かせ、狩猟にうち興ずるフビライ・ハーンを、ポーロは次のように称える。「ハーンのごとくかくも大いなる娯楽、愉楽をもちえる人物、かくも容易くそれを手の内にしえる人物は過去にも未来にもなからうし、現にこの世にはいなからう、と申せましよう」³²⁾。

13世紀の商人であるポーロ一行は、その教養の点から1230年から1235年にかけての古フランス語による制作とみられる、貴族趣味濃厚な『薔薇物語』前編³³⁾の読者であったはずもなからう。しかし当時のヨーロッパを席卷した「宮廷風」文化にあつての庭園の果たす役割は——その象徴的意味はともかく——経験の一部ではあつた、と推測される。この見事な、すでに中世の各国語版にみる本テキストの庭園——これが2万行を遥かに越える行間の占める唯一の場面である——の所有者であり、積極的に造園に携わった「愉楽」(Dedit)という名の擬人化(人物)の「技術」、「趣向」に示唆的である、とも読めようか? 『薔薇物語』ないしは「物語文学」を読む限りではこの点に沈黙が研究者にあり、または示唆に留まる。当然「愉楽」の庭園に外国から樹木を取り寄せる手段方法に不可欠の労働は注目されない。

アレキサンドリア³⁴⁾からあるいは異教の地³⁵⁾から、珍らかな樹木を搬入させ広大なグリーン空間を現出させた、という一節は「愉楽」の樹木への傾斜を指示する。いかにして遥か彼方から持ち込まれたか? これは国王の位階と指揮を予想する。

ヨーロッパ中世の詩的宇宙を独占しえるであろう人物は登場人物としての「愛神」(Amour)しか『薔薇物語』ではありえない。しかしこの系譜に連なるテキストにあつてかれは「権勢」を誇る実の人物³⁶⁾として君臨してはいない。せいぜい弓矢を携えて、——古典的伝統にあるそれはクピドンに過ぎない——「恋人」を追跡する。こよなく「陽気な」登場人物達に物語空間を提供しえたのは「愛神」ではなく、「愉楽」なのだ³⁷⁾。テキストの冒頭

で、キャロルを舞う人物達（招待客）を先導する——deduireは古フランス語で原義は「導く」、「先導する」を意味する³⁸⁾——ためにこの同一人物³⁹⁾が置かれている。「愉楽」の「園」を取り仕切る人物には、一方で薔薇の蕾みへと収斂していく、恋愛至上主義的抒情を展開するアイデアの世界に向かう「わたくし」と同様な強意が打たれている、と稿者は見る。装置をみずから仕掛ける者、外国よりの樹木搬入と造園とを指揮する「愉楽」によって、後代のヴェルサイユ宮の庭園にも比すべき、「物語」舞台がまず目論まれたはずなのだ。かれの尋常ではない富み、並みのものではない権力の掌握が示されているはずなのだ。

まして『薔薇物語』⁴⁰⁾の樹木への関心⁴¹⁾は例外である点からも注目されてもよいだろう——40種を数える樹木が「5ないし6トワーズ」⁴²⁾の間隔を置いて植え込まれた空間を歌い込む、1トワーズが6フィート（1メートル95センチとして膨大な面積⁴³⁾が想像される——このグリーン空間はまた「愉楽の場」(locus amoenus)⁴⁴⁾のステレオタイプとも大きく逸脱する。

またポーロの眼に映じたハーンの庭園は『薔薇物語』とも異なり、池を穿ち、その盛土で出来た築山を配する。グリーンは小高い山をなしていた、と言う。

「して樹木はすべて緑にして、築山も緑、真っ青な緑でないものは見えない。それゆえにそれ（築山）は「緑なる山」と呼ばれる」⁴⁵⁾

(si que *les arbres sont tuit vert*, et le mont tout vert ; si que il n'y pert autre chose que tout vert. Et pour ce est il appelez "le mont vert".)

この空間が至福の空間であり、「かかるたのしい愉楽 (dédruit)」を得、心楽しもうとハーンはこの場所を造らせた、とある。同じキーワード *dédruit* の使用に注目したい。樹木はハーンの「愉楽」であり、緑なす樹木がここで目的化されて際立つ。同時代ヨーロッパのテクストの稿者にとり極めて重要な擬人化「愉楽」が、モンゴルの覇者の「愉楽」⁴⁶⁾を喚起する、という機能上の呼応、さらに語法上の偶然として見逃しえない一致は強調されて然るべきであろう。これは「物語」作家であるルスチケロの筆の影響かもしれない。

またこの築山と対になった「池」⁴⁷⁾、魚が種々放たれ、泳ぐさまが語られるが、これは『薔薇物語』およびその伝統を踏まえる「愉楽の場」には欠落する⁴⁸⁾。

II. 並木と旅の指標

北京での冬のために、ハーンは贅を尽くした庭園を設えさせたが、これは直接の居住地にとどまらなかった、とポーロは証言する。異国からの使者、商人、旅人の便宜を計って、ハーンは大道に「大木を植え込」(planté grans arbres)⁴⁹⁾ませた。

「路はすべて1本1本近い間隔で巨木にてこのように造られ」⁵⁰⁾

(si que toutes ces voies sont ainsi faites *de moult grans arbres* l'un pres de l'autre)

tori & Astrologhi) の進言——植林は「長寿」(vive longo tempo) の秘訣とした——によったものと言う⁵¹⁾。

輸送力の稚拙な時代を共有したユーラシア大陸の両端東西にあって、かたや「愉楽」の、かたや大ハーンの樹木への執心はそれぞれ権勢とその顕示欲を満足させるものでこの共通点にこそ西欧からの旅行者は「驚異」の念を抱いたであろうし、ここに現在まで評家に注目されることのなかった「権力の場」としての「宮廷風文化の場」の位置づけがある。文学的に検証される、詩的主題として継承される前者のデータは、春五月の樹木の讃歌であるに対し、後者では冬期をも含む年間を通じての樹木の存在であり⁵²⁾、そこにポーロの「相違」への「驚異」の念があったろうし、ましてコピストたるルスティケロの同意が強く働いていよう。

III. ポーロとマンドヴィルの「アルブル・スル」(Arbre Seul)

ポーロ一家はペルシャに至り、その8王国が挙げられ、「ペルシャの最果てトウノカイン」(Tunocain, qui est a l'esue de Persie) (XXXIII)⁵³⁾が最後に名指される。この王国のみが北に位置し「アルブル・スルに近い」(pres a l'a(r)bre seul) (l. 7)。「いかに砂漠に行くか」(XL)⁵⁴⁾は、八日間というもの「果実、樹木、水なき地帯」⁵⁵⁾を騎行の末、トウノカインに到着する、とある。

XXXIII でまずペルシャの大略が地理上で紹介され、XL はポーロ一家の実際に足を踏み入れた見聞が述べられる。トウノカインの所在「ペルシャ国境北のあたり」⁵⁶⁾が正確にくり返され、「アルブル・スル」(arbre seul) ——普通名詞としてここまでは扱われている——の由来が語られる。

「キリスト教徒が『枯れ樹』と呼ぶ『1本樹』のある大いなる平原がある。いかなる様子かを述べよう。丈高く聳え、たいそう太い木である。」⁵⁷⁾ (l. 8-9)

(Et hi a une grandissime plaigne en le quel est *l'arbre seul* que appellent les cristiens l'arbre seche ; et vos dirai comant il est fait. Il est *que les cristiens appellent l'arbre seche* ; et vos dirai comant il est. Il est mout grant et mout gros.)

砂漠に行く旅人には眼にする樹木はなく、ましてそれがただ1本聳え立つ大樹であれば強い喚起力をもつ。「一本樹」は誰もが知るランド・マーク、むしろ地名としてかれらの間に知られていたと想像されよう。

「一方向のみに木々が10マイル先にみられるが、ほかは100マイル余にわたり如何なる木とてない。」⁵⁸⁾

(ne a nul arbres après a plus de c milles, for que d'une part que i a pres arbres a x milles.)

しかもここで「枯れ樹」と付会され、ローカルなキリスト教の伝承⁵⁹⁾が呼び覚まされている。

「アルブル・スル」に関し詳細な記述がなお続く。すべて葉は表裏が緑と白で、栗 (cas-

taigne)⁶⁰に似た毬をもち、それは空洞である。硬質の「木」(leigne)⁶¹で、「黄楊」(bus)⁶²に似て黄色である。

ポーロにおける「枯れ樹」に関する説明はここで終わる。

この伝承はオードリコ・ド・ポルドノーヌ (14世紀の宣教師。ラテン語による)⁶³ヴェンサン・ド・ボーヴェ (13世紀の著作家) (ラテン語による)⁶⁴等に散見しており、1356年に『旅行記』(古フランス語による)を著わしたマンドヴィルはかれより80年遅れでこの地を通過した、——そのレアリティは遥かに薄いものだが——少なくとも「枯れ樹」について詳しい報告をしている。

まず「一本樹」の所在はマンドヴィルではペルシャではない。ヨルダン西部の街へブロン⁶⁵、樹種は「黄楊」ではなく「樅」⁶⁶。詳細は樹齢で紀元前1800年頃の旧約の人物、アブラハムの時代にすでに「緑にして繁茂した葉」⁶⁷に被われた「一本樹」は、キリストの磔刑後に枯渇したことで「枯れ樹」⁶⁸と命名された。著者は次いで「黙示録」的な預言を報ずる。ヨーロッパの君主による聖地奪回が実現した暁には、かれらは「この『枯れ樹』の許にミサを執り行わせよう」⁶⁹そのとき異教徒のキリスト教への改宗があろう。「それゆえに人はこの樹(「枯れ樹」)を大層崇め、いつくしみ守っている」⁷⁰と結ばれている。

「十字架伝説」との深い関わりを稿者は先に指摘⁷¹してあるが①キリスト教的データはポーロにおいて次に述べるようにさらに②ギリシャ的偽故事に付会され、重層的な伝承と化していることが注目される。

IV. アレクサンドロス大王とその宿命の樹木

ポーロにおいて「一本樹」であり「枯れ樹」の描写に直接続いてのつぎの記述がある。

「ここがアレクサンドロスとダリウスの間で戦討ありしところ、とこの土地の人々は言う」⁷²

(Et iluec dient celz de celle contree que fu la bataille entre Alixandre et Dayre.)

ポーロの聞いた話は、ペルシャ北部の百マイルに渡り見渡す限り樹木とてない——ただ一箇所十マイルを隔てて何本か目立たぬ樹木はあるとしても——地方なのだ。そこにただ一本大木が佇立する。この「一本樹」は砂漠の厳しい大自然の条件下にあり、現地人は接触する外国人にその目的がなんであれ(宣教、巡礼、商用)2つの異なる伝承を伝える。

① キリスト教伝承の「枯れ樹」、

② インドへと遠征の途上ペルシャ王との一戦の地、アレクサンドロス大王ゆかりの古戦場である。

マンドヴィルのヘブロンがポーロでペルシャへと場面を移動させている、これはアレクサンドロスとの関連づけではじめて整合性が出てくる。XLの古戦場がたまたま「一本樹」と近接したところにある、とも読めるかもしれない。この「偶然」の可能性はCCIII章の点検で排除される。

「近東の主アバガ⁷³⁾は多くの地方、多くの領土を所有し、かれの領地はカイドウ王の領土に隣接し、それはアレクサンドロスの書に『枯れ樹』と呼ばれる『一本樹』の方向にある。してアバガはカイドウ王およびその臣下がかれの領民および領土を損なわぬように、王子アルゴンと夥しい騎兵を『枯れ樹』の地方に遣わした。(…)アルゴンは『枯れ樹』の平原にその配下のものと留まった」⁷⁴⁾

((…) Abaga, le seignor dou levant, tenoit maintes provences e maintes teres ; e sez teres confinoient con les teres dou roi Caidu ; e ce estoit dever *l'arbre sol que eu livre d'Alexandre est apellé l'arbre seche*. Et Abaga, por ce que le roi Caidu ne sez jens feissent domajes a sez homes ne a sez teres, mande son filz Argo(n) con grandissime quantité d'onmes a chevaux *en la contree de l'arbre seche*, (...) demorait Argon con sez jens *en celz plaigne de l'arbre seche* ;)

戦勝によって、アルゴンの許に父の臣下たちが参集し服従を誓う。ついで国境警備をその間も重視したアルゴンは自ら出陣することなく息子カサン (Casan) に3万の騎馬兵を付け「枯れ樹」⁷⁵⁾に派遣する (CCXV)。続く CCXVI ではアラゴンの死と「枯れ樹」⁷⁶⁾にあったカサンはそのために死者の叔父 (カサンにとり大叔父) に王位を奪われる顛末が語られている。

上記引用中の『アレクサンドロスの書』に『枯れ樹』と呼ばれる『一本樹』と述べられてより以降は、「一本樹」の名称は消えて「枯れ樹」がテキストで定着する。

「一本樹」=「枯れ樹」が『アレクサンドロスの書』にある、の明示がある限りすでに口承による伝え聞きではない。だがポーロの読書からきている、とは容易に想像し難い。それに初出箇所なぜ本書引用を示さなかったのか、の疑問も残る。権威ある書に依拠する、これは当時の文学上の広く行われた習慣であったはずである。

ここに文学的素養のあるルスチケロの介入をみるのはより自然であろう。語りを筆記しつつも独自のただし書きを挿入した、のではなかったか？

本稿で重要なのはまず「一本樹」があり、「枯れ樹」(「枯れ樹」は先述のごとく、キリスト教伝説からきている。)が導入され、それに大王の名が付会されている事実である。だがポーロでこの付会は実は逆になっている。

「一本樹 (sol)」は古フランス語の「太陽」(sol) との同音異義性に起因、「一本」と「太陽」の「混同」が生じているとみることも可能か？(「太陽の樹」=「一本樹」の付会はこのペルシャ北部のギリシャの英雄緑りの地であることに拠ろう。ポーロには英雄の故事がほかにも六箇所にわたり読まれるのだ。

- ① 大王がポネント (ponent) に赴いた時、路の狭隘、険しき故、行く手を阻まれたこと (XXIII)⁷⁷⁾
- ② 追撃を受けぬよう、「塔」(tour) と「城塞」⁷⁸⁾を築かせ「タタール人」を「幽閉」(enclouse) (『アレクサンドロスの書』(livre Alixandre) (XXIII)⁷⁹⁾
- ③ XL (上掲)
- ④ 大王のダリウスの息女との結婚 (XLV l. 4)⁸⁰⁾
- ⑤ イスラーム国バラシャンで④の結婚で生まれた子孫が王位を継承「偉大なるアレク

サンドロスへの敬愛故に」(por le amor dou grant Alixandre)「ズルカーネイン」(Çulcarnein)⁸¹⁾を名乗る(XLVII)⁸²⁾

⑥ CCIII (上掲)

とくに②の『アレクサンドロスの書』への再度の言及は見逃せまい。ここにもあるいはポーロと向かい合うルスティケロの介入がある。つまり大王に関しては二重の遡源が考えられる。1)はオラルの水位(現地性)、2)は文書(ロマネスクな書き換えと翻訳)の存在である。1)は④に関しての誤り⁸³⁾、——大王は実際はダリウスの息女と結婚はしていない——が土着伝承に起因しているものとも解釈される。従って④はそれが史実に違うとしても、この地方に行く旅行者のレポートとしては正確である、とも看られること、あらゆる可能性に向かって開かれた余裕が古いテキストに臨む者に期待されよう。

2)読みからくる、と判断される時ルスティケロが挙げられようし、『アレクサンドロスの書』⁸⁴⁾とは史実にはないが大王の甥の名を擁して中世に生成をみる伝説群に関連があろう。

マケドニア王アレクサンドロスの生涯はかなりのところまで詳細は知られている。ヨーロッパ中世もアリストテレスの甥とみなされるカリステーヌ(生年は紀元前370年頃)による大王の生涯が、忠実な証人——伯父が大王のもとに教育係として伺候のおり10年程を傍らにあったし、追って334年大王のインド遠征に文人の一行と共に合流した、その眼で大王の行動を確認し、耳でその言説を聴きえた「証拠」を後世に残すにまさに適格者のはずであった——の手になる、を離れて生成をみる。『擬カリステーヌ』⁸⁵⁾はギリシャ語からラテン語に翻訳されて大王の生涯のロマネスクな水源となってきた。

アレクサンドロス伝説は『偽カリステーヌ』を基に幾多の伝説素の生成をみる、——その一つに『アレクサンドロスからアリストテレスへの書簡』⁸⁶⁾——に由来したとみられる大王の運命を預言した「陽の樹」、「月に樹」と対になっている)と入れ替えがおこなわれているものともみられる。この点がここで問題とされねばならない。

大王の東方遠征⁸⁷⁾は祖先(ヘラクレス)⁸⁸⁾に倣った所業であったしバビロニアに引き返した大王は西方討伐を思案し帝国の構想を練っていたと言われるが果たされなかった⁸⁹⁾。幾多の抵抗を排して東漸、インダス河を327年春にかけて渡り、その夏インド王ポロスを倒す。秋、疲労困憊の軍を北東の地まで進め得ずバビロニアに後退を余儀無くされる。紀元前323年6月13日、そこに没す。

[樹木と運命の預言] インドの砂漠地帯にあって、大王はいかなる遠征の終わりがあるか、みずからの生命が長いかな否か、この世の冠を頭上に置いた後、いかなる終焉があるのか?を預言の力を持つとされる2本の樹木に祈願、宣託に耳を傾ける。短命、王冠を置くや配下による毒殺、母と姉妹の死を告げられる⁹⁰⁾。

『偽カリステーネ』系のヴァージョンはギリシャ語から、アルメニア、シリア、ブルガリア、ルーマニア、セルビア、ボヘミア、スロベニア、グルジア、ロシア語と夥しい数の翻訳を見る。そうしたヴァージョンからの影響さえ考えられようが、抜きん出て研究の進んでい

るラテン語、古フランス語（韻文および散文）に基づき続く論考で取り上げられるはずである。

identité, analogie という規範——秩序の基盤——を果敢にも抜け出て、——それはあるいは執筆を意図した時期、筆写を引き受けてくれる者との出会いの過程であった公算は大きい——未知なるものへの対応を迫る、不断の危険にと向った『世界の叙述』、「差異の叙述」の著者は人間本来のノマディズムが見透かされるとされる「巡礼」⁹¹⁾の道筋からも出外れた。「定点」としての「場」である「庭園」に固定した理想を螺鈿のように嵌め込んだ中世文学は「宮廷文学」としてまず定義づけられてきたが、アレクサンドロスの「アルブル・ソル」を確認しつつ「差異」⁹²⁾に感動した最も初期の中世人がここにいた。

註

“*L'arbre seul, dans la nature, pour une raison typifique, est vertical, avec l'homme*” (Paul Claudel, “Le Pin”, in *Connaissance de l'Est*, Paris, 1973, p. 248) の意訳。1898年5月31日、横浜—東京間陸路の移動中に発想を得、推敲の跡著しい3ページの小品。「樹木」はここで「松」を指す (G. Gadoffre, *Ibid.*, p. 252)。

- 1) ソルボンヌ大学の Philippe Ménard 教授による 1992年10月28日、明星大学（日野キャンパス）における講演「マルコポーロと未知の国・アジアの図」（当日の紹介および翻訳は稿者による）は“L'illustration du “Devisement du Monde” de Marco Polo,” (原題) として『明星大学研究紀要』、日本文化学部、言語文化学科、No. 2 (1994), pp. 152-178 に収録をみた。（とくにここでは稿者による解説 (pp. 152-156) を乞参照）。
- 2) 「バリ地理学会」による 19世紀の刊行本、D'Avezac, *Recueil de Voyages et Mémoires*, t. I, 1824 は、L. F. Benedetto, *Marco Polo*, Firenze, 1929 に置き換えられるべきものか。本書は A. Ricci により刊行後ただちに現代英語訳される (*The Travels of Marco Polo*, translated into English from the text of L. F. Benedetto, London, 1931. 我が国の二主要訳書（愛石松男、青木一夫氏訳は Ricci 本の重訳である）。L. F. Benedetto, 前年現代イタリア語訳をまず刊行した *Marco Polo, Il Milione*, Firenze, 1928. 近年 G. Ronchi, Milano, 1982 の現代イタリア語訳もベネデット版本 (1929) に拠る。後者は C. Segre 解説ページを含み、前者の専門家向け版本にたいし、広範な読者を想定している。
- 3) 前書きにつきのように読まれる：“Et fu, celle coppie, baillee dudit Sire Marc Pol audit Seigneur de Chepoy, quant il ala en Venise” (J. P. G. Pauthier, *Le Livre de Marco Polo*, Paris, 1865, p. 2)。
- 4) ポーロの文献学的研究はオリジナルとされるフランス語に関し 15歳そこそこでヴェネツィアを去ったマルコがフランス語を書くことができたとは想像しがたい。物語作家ルスチケロ（リュスティシアン・ド・ピーズ）とジェノヴァの牢獄を共にし異様な経験に関心をもった後者によりフランス語で直接書き取られ、編集されたという説が有力である（本稿註1）参照——の写本を初めとするヨーロッパ各国語による 13世紀から 15世紀にかけての初期翻訳およびその関連の研究が非常に遅れをとっている現状では——旅行家、東洋学者および地理学者、歴史学者の注意をまず牽いてきたと言う事実にとらえろ——フィリップ・メナール教授とその周辺の仏文学者の代表的な写本の総合的研究と版本（本学の講演時より準備されてきた（上掲註1）の近い刊行を待つのが望ましかろう。ポーロ生存中の、ポーロからチボー・ド・シュボワ（Thibaut de Chepoy）に手渡された草稿より出て、極めてこれに近い写本が——グレゴワール（Gregoire）という人物によりイール・ド・フランス語（おおよそ後の標準フランス語）に修正、手加えられた。グレゴワール本とも言われる。さしあたって本稿では版本 L. F. Benedetto, Firenze, 1929（上掲註2）参照——稀観本——および Ed. par J. P. G. Pauthier（上掲註3）参照）に依拠する。（ポーチェを定本として註を付加した H. Yule et H. Cordier, *The Book of Ser Marco Polo*, London, 1871, 1875, によるのが青木富太郎氏訳）。本稿は中世フランス文学を手掛けてきた者の、時に写本に遡り、論をすすめる便宜上 Benedetto (1929) および Pauthier (1865) を提示、専門家向けをまず意図する（こうした但し書きが必要なのであろうか？）
- 5) Ed. cit. de Benedetto. p. 3, ll. 6-7 「世界の種々の地方の真の有様 (pure verité)」(Ed. cit. de Pauthier, p. 3)。
- 6) 「マルコ氏が見出した多様性 (diversités) の叙述の書を始めよう」(Ibid., p. 33); 「多様性」と「驚異」を語る、は序論部でさらに繰り返される。cf. *ibid.*, pp. 27-28.
- 7) Ed. cit. de Benedetto p. 3, ll. 6-7; éd. cit. de Pauthier, p. 4, ll. 6-7. 中世の旅行記で、ポーロにおける三人称単数（かれは父と叔父と絶えず一緒に旅しているが、語る者はマルコである）は注意したい。ワーナーはマ

- ンドヴィルを問題にして以下の2人の旅行者に関し、14世紀の宣教師オードリコ・ド・ポルドノーヌ (Odo-ric de Porderone) もアイルランド人の連れがいるが、一人称単数、ジャン・ド・マンドヴィル (Jean de Mandeville) も2人の同行があるが一人称単数である (G. F. Warner, *The Buke of John Mandeville* (Egerton, ms. 1982), Westminster, 1889, Introduction, p. xxvii)、生成に関しこの問題は重視されよう。
- 8) Ed. cit. de Benedetto p. 4, l. 1; éd. cit. de Pauthier, p. 4, l. 11.
 - 9) Ed. cit. de Pauthier, p. xxvii.
 - 10) 想像界に棹をさす度合いの遙かに大きいマンドヴィルでは「巡礼」の為に書かれたとある。
 - 11) 第三部のインドの部は「驚異」がまず強調される。Cf. Ibid., CLVII, p. 534: "Cy comence des *merveilles* qui sont en Ynde".
 - 12) 1483年版のGoudaラテン語訳のポーロがセヴィリアのコロンブスの図書館に保存されている (J. Heers, *Christophe Colomb*, Paris, 1981 p. 130)。
 - 13) マルコの同時代人、ポローニャのフランチェスコ・ピピーノ (Francesco Pipino) が中世ヴェネツィア地方語による訳本からラテン訳を試みる (1320年頃完成をみたか、マルコ生存中とされる)。このラテン訳の成功は、ドイツ語、スペイン語、トスカナ語、さらにこのラテン訳に手を入れた版等夥しい異本をも生ずる。これらラテン語訳 (ピピーノ版とその改訂版) とは異なるラテン訳も後に出現する。
 - 14) このコンテキストから『世界の叙述』は豊富なデータを提供してくれるが、枚数の制約もあることから、第三部「楽園のりんごの樹」(éd. cit. de Pauthier, CLXXII, p. 638); 「タンブール (ピンロウ樹)」(éd. cit. de Benedetto, CLXXVII; éd. Pauthierはこの部分を省略); 「胡椒の樹」(Ed. Pauthier, CLXXIV, p. 644); 「タマランディ」(ナツメヤシの樹) (Ibid., CLXXVIII, p. 658); 「木綿を生ずる樹木」(Ibid., CLXXVIII, p. 660); 紫檀 (Ibid., CLXXXV, p. 178) などを扱わない。また対照表となるマンドヴィルの「粉や他の毒を生ずる樹木」(*Mandeville's Travels*, texts and translations by M. Letts, (The Paris Text), t. II, London, 1953, Ch. 21, pp. 337-341) (写本は B. N. n. acq. f. fr. 4515); 日中成長を続け果実をむすび、日没とともに地中に姿をかくす樹木 (Ibid., Ch 30) など考慮せず、局所的な考究である。
 - 15) 「神のごとく」「人の崇め」(Ed. cit. de Pauthier, LXXXVII, p. 295, l. 1)。
 - 16) マンドヴィルも「天の下」(dessous le firmament) (Ed. cit. de Letts, Ch. 24, p. 359)、「大地が上にも下にも」(ne dessus ne dessous terre) (Ibid., Ch. 25, p. 368) 大ハーン (Le Grant Chan) に勝る皇帝や、君公はいない、と断言している。
 - 17) 宮殿を囲む広大な川、泉水、牧場、動物、鳥小屋、乗馬のフビライの散策。森の中の休憩のための竹で出来た館が命のままに移動が可能である事など、その詳細な記述は明らかにテキストの主調「驚異」のそれである (éd. cit. de Benedetto, pp. 74-76)。
 - 18) 冬期三ヶ月のハーンの楽しみは狩猟であった (Ed. cit. de Pauthier, LXXXIX, pp. 298-299)。
 - 19) マンドヴィルでも大ハーンの庭園の植物は果樹である; "moult de divers arbres portans fruit de moult de manieres" (Ed. cit. de Letts, Ch. 23, p. 350)。
 - 20) Ed. cit. de Pauthier, LXXXIII, p. 269, ll. 13-18.
 - 21) Ibid., LXXXIII, p. 269, l. 18-19.
 - 22) マンドヴィルにあっても「山の老人」の庭園に果樹が植えられる (éd. cit. de Letts, Ch. 30)。
 - 23) Ed. Pauthier., XL, p. 98, ll. 2-4; Ed. Benedetto, p. 33, ll. 6-7.
 - 24) Ibid., XL, p. 98, ll. 13-14.
 - 25) Ibid., XL, p. 98, l. 11. イスラームの「庭園」はまたハーレムでもある (XL, p. 98, l. 14)。
 - 26) "Mahomez dist que leur paradis seroit beaus *jardins* plains de conduis de vin, et de lait, et de miel et d'aigue," (Ibid., XL, p. 98, ll. 12-14).
 - 27) 拙稿『人間は樹木のごとく…』(I) (『表現——目的と手段』明星大学青梅校舎日本文化学部共同研究論集・第2輯 (所4文)) 参照。「創世記」が問題となる。
 - 28) Benedetto 版本では「果樹」と明示がある。(上掲註23))
 - 29) 600年前のこうした大事業に驚嘆したポーロ学者ポーチエをして今日 (19世紀中葉) のパリで大樹を根付きで運搬するため「大型の、どっしりした荷車」と「大形の馬」が動員され、手段はほとんど変わらぬ、と (Ed. cit. de Pauthier, LXXXIII, p. 269, note 9))。
 - 30) 使節としてチャンバ国 (ヴェトナム) に派遣されたポーロはフビライの許に「最も立派な、最も大きな」20頭の「象」を「貢ぎ物」として献上させる手筈を整える (Ed. Pauthier, CLXI, p. 555, ll. 21-22)、これは誇らかな報告であったろう。
 - 31) またフビライは4頭の「象」上の籠に乗り狩猟をする習慣があった (Ibid., XCII, p. 308, l. 1)。
 - 32) "Si que je vous di bien en verité que onques ne fu ne ne sera, je croi, qui *si grant soulaz ne deduit* puisse avoir en cest monde comme cestui a; ni qui miex en eust le pouvoir de faire le." (Ibid., XCII, p. 308,

- ll. 12-15).
- 33) Guillaume de Lorris, *Le Roman de la Rose*, éd. par D. Poirion (B. N. f. fr. 25523 による), Paris, 1974, pp. 43-139; éd. F. Lecoy (B. N. f. fr. 1573 による), t. I, Paris, 1965, pp. 1-124; éd. A. Strubel (B. N. f. fr. 12786 および 378 による), Paris, 1992 pp. 42-267.
- 34) “de la terre Alixandrins/fist ça les arbres apoter” (éd. cit. de Lecoy, vv. 591-592). cf. éd. Strubel, vv. 592-593.
- 35) “de la terre as Sarradins/Fist ça ces arbres apoter” (éd. Poirion, vv. 592-593).
- 36) 戒律 (les commandements) (Ibid., v. 2059) を陳述する場面を除く。
- 37) 「愉楽」、「陽気」の演出、これはアーサー王伝説の「物語」群にあって、騎士達に高揚した気分を保証しえる者、アーサーの役割であった。証言を集めるのは容易であるが、Cf. Ph. Ménard, *Le Rire et le Sourire dans le Roman courtois en France au Moyen Age, (1150-1250)*, Genève, 1969, pp. 420-426; E. Baumgartner, “Arthur et les Chevaliers “envoisiez””, in *Romania*, t. 105 (1984), p. 321-322.
この王者に優れて課せられた義務を怠るアーサー王——「窓辺のアーサー」は単なるトピックスではない——として稿者の見解は他で述べた (“Artus “as fenestres” et son départ “parmi la mer””, 『明星大学研究紀要』, 日本文化学部、言語文化学科、N°6 (1998), pp. 205-214).
- 38) この語は活動と具体とを想定する (J. Dufournet, *Guillaume de Lorris, Le Roman de la Rose*, Paris, 1999, p. 258)。
- 39) 「愉楽」の園の戸をあけた「閑暇」(Oiseuse) は自分が「愉楽」と「親しき友、連れ」(Privée (...) mout et accointe/De Dedit) (éd. cit. de Poirion, vv. 589-590) と名乗る。「閑暇」は宮廷風文学に通定する基本概念であるはずで、「愉楽」との関連を含めて、以下の拙稿参照、“Sur le personnage d'Oiseuse”, in *Etudes de Langue et de Littérature Françaises*, 日本フランス語フランス文学会、N°32 (1978), pp. 1-24.
- 40) 『薔薇物語』における樹木への圧倒的な関心はすでに十分に本学『紀要』(N°13 (1977), pp. 29-45) をまず皮切りに次の拙稿でテキスト、視点、主題を変えて論点を明らかにしている。“Le Jardin et son “estre” dans le *Roman de la Rose* et dans le “Dit dou Lyon”, in *Cahiers de l'Association Internationale des Etudes Françaises*, N°34 (1982), Paris pp. 25-37;” Symbolisme végétal (plantes piquantes)”, in *Mélanges offerts au Professeur Alice Planche*, Paris, 1984, pp. 455-464.
- 41) 近年『薔薇物語』の樹木への関心が中世仏文学にあって例外的である、というコンコルダンスにより論証を試みた著書が著わされている (ただしラテン文学が主眼で『薔薇物語』は導入部にすぎない)。
- 42) “Li uns fu loing de l'autre assis/Plus de cinc toises ou de sis;” (éd. Poirion, vv. 1367-1368).
- 43) toise は厳密には1メートル949センチにあたる。
この度量衡は中代英語によるチョウサー (Geoffrey Chaucer) 訳とされる『薔薇物語』のこの一節 toise は *fadome* (1m. 83) とある (*The Romaunt of the Rose and the Roman de la Rose. A Parallel-text*, ed. by R. Sutherland, Oxford, 1968, p. 28).
Cf. 『薔薇物語』で想像を絶する面積は上記 (本稿註 (40) 『紀要』および AIEF 掲載論文) および以下でも指摘かつ強調してきた。Cf. 拙訳注書『薔薇の物語』、大学書林、昭和63年、p. 6。
- 44) E. R. Curtius, *Europäische Literatur und Lateinisches Mittelalter*, Bern und München, 1948, pp. 191-209.
- 45) Ed. cit. de Pauthier, LXXXIII, p. 270, ll. 2-4; Ed. Bene-detto, p. 76, ll. 53-55.
- 46) 上掲註 (32) 参照。
- 47) Ed. Benedetto, p. 75, ll. 41-45. シュボワ (Ed. cit. de Pauthier) には次の「池」(lac) の描写が省略されている。
- 48) 「泉水」、「川」はあるが、あくまで澄んだ、輝く水が問題である。鳥類、魚類など水の動物は不在。ただし、『薔薇物語』(前編)に先行する、——12世紀末——作者も知っていたはずのアンドレア・カペルラーヌス (Andrea Cappellanus) によれば「愉楽の場」の「泉水」(fons) には「あらゆる種の小魚」(omnium generum pisciculorum species) が見られた、と言う (*De Amore*, recensuit E. Trojel, München, 1972, p. 100)。
- 49) Ed. cit. de Pauthier, XCIX, p. 342, l. 3.
- 50) Ibid., XCIX, p. 342, ll. 4-5.
- 51) シュボワ本 (Ed. cit. de Pauthier) にも B. N. f. fs. 1116 (éd. Benedetto) にも理由づけは現れない。Ramusio (1559年、f. fr. 1116以前のテキストによる伊訳) による (éd. Benedetto, p. 98, note. b)。
- 52) ヨーロッパ中世宮廷風文学 (騎士文化も含めて) に冬の季節は完全に欠落する。最も初期の、しかもこの季節を人生観のうちに取り込み、自己の表象とした詩人シャルル・ドルレアン (Charles d'Orléans) の出現を待たねばならない (拙学位論文、*Sur le thème de Nonchaloir dans la poésie de Charles d'Orléans*, Paris, 1974 および『シャルル・ドルレアン詩研究』、フランス図書、1978 (文部省研究成果刊行費による) 参照)。

- 53) Ed. cit de Benedetto, XXXIII, p. 25, l. 6.
- 54) Ibid., XL, p. p. 32
- 55) Ibid., XL, p. 32, l. 2.
- 56) Ibid., XL, p. 32, l. 6.
- 57) Ibid., XL, p. 32, ll. 8-9.
- 58) Ibid., XL, p. ll. 11-12.
- 59) ポーロにおける「枯れ樹」が『旧約』の「エゼキエル」(XVII, 24) からか。
- 60) Ed. cit. de Pauthier, XL, p. 32, l. 10.
- 61) Ibid., XL, p. 32, l. 11.
- 62) Ibid., XL, p. 32, l. 11.
- 63) Odorico de Pordenone, "Liber de Terra Sancta", in J. C. Laurent, *Peregrinatores Medii Aevi Quatuor*, Leipzig, 1864, p. 154.
- 64) Vincent de Beauvais, *Speculum Historiae*, Douai, 1624, xxxi, 59. この2者((63), (64))からのマンドヴィルの借用が提出されている(H. Yule, *Cathay and the way thither*, London, vol. II, 1913, pp. 8-13 (オードリコに関し)、(ヴェンサンに関し)(Ed. cit. de Letts (上掲註(14)参照)、t. I, p. 48, note 3)。
- 65) Ibid., t. II, pp. 244-245. オードリコはTauris (ベルシャ)の地名を挙げている(Ed. cit. de H. Hule, vol. II, p. 103, note 2)。
- 66) "arbre de chesne" (Ed. Letts, t. II, p. 264). 現地人はこの樹をDyrp (Ibid., p. 265)と呼んでいた。
- 67) Ibid., t. II, p. 265.
- 68) Ibid., t. II, p. 265.
- 69) Ibid., t. II, p. 265.
- 70) "Pour ce a on larbre en grant reverence at le garde on bien chierement" (Ibid., t. II, p. 265, ll. 13-14).
- 71) 拙稿『人間は樹木のごとく…』(I) (上掲註27) 参照に論述した。
- 72) Ed. cit. de Benedetto, XL, p. 32, ll. 12-13.
- 73) 在位 1265 年—1282 年.
- 74) Ed. cit. de Benedetto, CCIII, p. 222, ll. 1-9.
- 75) Ibid., CCXV, p. 229, l. 6.
- 76) Ibid., CCXVI, p. 229, l. 3.
- 77) Ibid., XXIII, p. 16, ll. 6-7. キップチャック (南ロシア)
- 78) グレゴワール本 (Pauthier 版) には欠落するが「塔」が「鉄の門」(Porte-de-fer) (l. 5) と呼ばれる。
- 79) Ed. cit. de Benedetto, XXIII, p. 16, ll. 10-14.
- 80) Ibid., XLV, p. 35, l. 4.
- 81) 「フランス語ではアレクサンドロスを意味する」(Ibid., XLVII, l. 5)。ローマの皇帝たちのアレクサンドロスの個人崇拜はインドにいたるまで受け継がれていた(J. H. Philipot, *The Sacred Tree or the Tree in Religion and Myth*, London, 1897, p. 99)。
- 82) Ed. cit de Benedetto, XLVII, p. 36, ll. 3-5.
- 83) ベルシャ王、ダリウスとの一戦に勝者となったアレクサンドロス大王は服従を相手に誓わせる(BC 333)がダリウスはその年7月獄死している。BC 327年に実際はアレクサンドロスはダリウスの息女ではなく、その仲介でバクトリアの実権を握るオクシュアルテス(Oxyartes)の娘ロクサーナ(Roxana)と結婚。大王の子孫にかんして東洋学者ポテイエの詳細な註を参照(Ed. Pauthier, pp. 117-118, note 2)。
- 84) ここで正確な遡源研究——ルスチケロが「アレクサンドロスの書」と名指している「書」はなにかの特定はここではさておき、——先に推定を試みたい。これは写本模写のコピストの水準での「混同」であったかもしれない。
- 85) *Pseudo-Callisthène (texte L)*, éd. par H. Van Thiel. Darmstadt, 1974.
- 86) *Epistola Alexandri Macedonis ad Aristolem magistrum suum de itinere suo et de situ Indiae*, éd. par B. Kuebler, Lipsiae, 1888.
- 87) "Domitor Orientis" (Ch. Frugoni, *La Fortuna d'Alessandro Magno dall'Antichità al Medioevo*, Firenze, 1978, pp. 7 et 85). 一方、ローマ皇帝たちの大王の個人崇拜がこの方向に大きく関わる(Ibid.)。
- 88) Arrianus, *L'Inde*, éd. par P. Chantraire, Paris, 1927, VII, 1, 3 et 15, 5. 東方遠征(史実)の神話的解釈はアーサー王によるその足跡を訪ねるという新たなアーサー王伝説に組み入れらるべき「神話」を生ずる。以下の拙稿参照。"E si veira les bones, (...) / Que Artus aveit faites en Orient fichier", in *Mélanges offerts à Lionello Sozzi*, t. I, Paris-Torino, 1996, pp. 1-21.
- 89) 『イリアッド』の校定本も手掛けたとされるカリストレーヌはアレクサンドロス大王をホメロス流の英雄に仕

立て、ヘラクレスの子孫と位置づける。『擬カリステース』のアレクサンドロスに神格化に伴う「東洋の覇者」(Ch. Frugoni, *Op. cit.* (上掲註87))とする方向はあきらかに執筆当時、3世紀のローマの「帝国主義的イデオロギー」に合致するものでもあった。

90) *The Medieval French Roman d'Alexandre*, ed. by E. C. Armstrong, vol. I-VI, Princeton-Paris, 1937-1942; Alexandre de Paris, vol. II, vv. 3721 sqq.; version de Venise, Museo Civico, vol. I, vv. 6240 sqq.; version des Archives Arsenal, vol. I, vv. 2960 sqq.

91) R. Oursel, *Les Pèlerins du Moyen Age*, Paris, 1963, p. 24.

92) 「驚異」は虚言として看られたか? マルコ・ポーロは「百万の」虚言を弄する、という評判をとっていた、とされる。写本によっては *Il Milione* が張り付いたものがある。上掲註2) 参照。

稿者は15世紀初頭のクリスチヌ・ド・ピザン(Christine de Pizan)を紀行の観点から検討しているが、「差異」への志向はない(“Le poète et Pallas dans le *Chemin de Christine de Pizan*,” in *Revue des Langues Romanes*, Paris, t. XCII (1988) (numéro spécial), pp. 369-380; 「地誌と想像界の道と名所」(『アーサー王伝説における聖域への舟と道』、中央公論事業出版、1989)。

本稿は以下の論文と共に「文部省科学研究費(平成8年~10年度)」による研究成果である(Les travaux qui suivent ont fait l'objet de subside du Ministère de l'Education Nationale du Gouvernement Japonais (1996 à 1998))。

- ① “E si veira les bones, (...)/ Que Artus aveit faites en Orient fichier,” in *Studi di Storia della Civiltà letteraria francese, Mélanges offerts à Lionello Sozzi*, vol. I, Paris, 1996, pp. 1-18; ② 『『散文トリスタン物語』とHudent およびその子孫の介入』、明星大学・日本文化学部・言語文化学科『研究紀要』、N°5 (1997), pp. 150-162; ③ “Anel et Seel: de Béroul et du *Lancelot au Roman de Tristan en prose*,” in *Miscellanea Medievalia, Mélanges offerts à Philippe Ménard*, t. II, 1998, Paris, pp. 1203-1212; ④ 『『散文トリスタン物語』への視点——二人の狩人=騎士とブラシェ犬の介入』、『普遍文明と民族文化』明星大学青梅校舎日本文化学部共同研究論集・第1輯(1998), pp. 92-125; ⑤ “Artus “as fenestres” et son départ “parmi la mer””, 明星大学・日本文化学部・言語文化学科『研究紀要』、N°6 (1998), pp. 205-214; ⑥ “L'image canine du *Roman de Tristan en prose* à Brunetto Latini,” (国際宮廷風文学会総会研究発表(カナダ、ヴァンクーヴァー、1998/7)(印刷中)); ⑦ 『『人間は樹木のごとく……』一樹木の伝説・聖杯の伝説一』(印刷中); ⑧ 『『人間は樹木のごとく……』(II), 二人の旅人』(印刷中); ⑨ 『『人間は樹木のごとく……』(III) 一樹下の従姉たち一』(印刷中); ⑩ “Alexandre le Grand dans le *Devisement du Monde*” (近刊、於フランス); ⑪ “La Flore et la Faune dans le *Devisement du Monde*” (近刊、於フランス) ⑫ Intervention de l'autre à la cour d'Artus (国際アーサー王学会総会研究発表、於イタリア・ガルダ、1996/8) (要約 *Bulletin Bibliographique de la Société Internationale Arthurienne*, tome 49 (1997), p. 374) 近刊、於フランス) ⑬ 「ヨーロッパ中世の死生感——ある〈彼岸〉の消滅——」(明星大学青梅校舎第8回公開講座、26/6/1996 (『青梅会報』。第9号(1996) pp. 117-128) ⑭ 「吟遊詩人トリスタン」、(明星大学青梅校舎日本文化学部合同研究会、21/12/1996) (近刊)、⑮ Tristan et ses/les “brachets” —— dans le *Roman de Tristan en prose, Miscellanea Medievalia, Mélanges offerts à François Suard*, Paris, 1999) (印刷中)、⑯ 「説話と神話の相互シフト」、日本フランス語フランス文学会秋季総会、シンポジウム〈神話と文学〉基調報告(於名古屋大学、2/11/1996) (近刊)